

依命留学報告書

学科名 栄養科学科

職名 准教授

氏名 秋山 聡子

1. 留学先 The University of Reading (英国)
2. 研究課題 ピクルス中のポリフェノール量と組成の分析
3. 留学期間 令和2年10月3日～令和3年10月2日
4. 留学期間中の活動報告

当初、4月に出発予定だった留学はコロナ感染症の影響により延期となった。夏になり現地の規制が緩和されたため、10月出発の手続きを経てやっとの思いで出発した。しかし、入国したその日から感染者数が跳ね上がり、早々にナショナルロックダウンを経験することとなった。レディング大学の研究室に通えたのは6カ月間。正直、イギリスのコロナ感染症対策を経験しに行ったような1年間だったが、前向きに捉えれば、留学 with COVID-19 だったからこそ体得できたこともあり、今後の教育研究に還元したい所存である。

現地での研究の目的は、野菜をピクルスにすることにより生じるポリフェノール組成の変化の解析であった。イギリスを含むヨーロッパ諸国では様々な野菜や果物をピクルスにして食している。野菜をピクルスにすることは、嗜好も影響しているが、保存食としての加工も兼ねている。留学前より、野菜を煮熟する際に酢水を用いると、水を用いるよりもポリフェノールの損失を抑制する結果を得ていたが、酢を用いた非加熱調理（酢漬け）の影響は未知であった。現地食材でピクルスを調製し、調理前後のポリフェノール量および組成を分析した。今後もレディング大学と協力し解析を進める予定である。

レディング大学には留学生が多く在籍しているだけでなく、スタッフの国籍も多岐にわたる。当然、オンラインが主であったが、ほぼ毎日ミーティングがあり、研究のディスカッション後に、未曾有の状況をどのように受け入れるか、気持ちを切り替えて前を向けるか、与えられた環境で粛々と業を進められるか等、研究だけでなく生活そのものに対する話題についても話し合うことができた。個人はもとより国民性がみられ、各国の対応についても知ることができ、ミーティングに参加していること自体が貴重な経験であった。

留学を終えて、研究活動もイギリス生活の経験もどこか不完全燃焼で、自分がどれだけ成長できたかは疑問である。しかし、イギリスでコロナ禍を過ごしたこと、レディング大学関係者はもちろん現地在住の方々とも出会えたことは大きな財産となった。今後はこれらを教育および研究活動に活かし、本学に少しでも貢献できるよう邁進したい。

最後に留学を支援してくださった東京農業大学の皆様、快く送り出してくださった栄養科学科の先生方、未曾有の状況にも関わらず留学を受け入れてくださった Jeremy P.E. Spencer 教授、そして、現地で、日本で、支えてくださった皆様に厚く御礼申し上げます。